様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１４５５

研究課題名（和文）シベリア出兵と東アジア国際環境の変動

研究課題名（英文）The Siberian Intervention and the Changing East Asian International Environment

研究代表者
兎内　勇津流（Tonai, Yuzuru）

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授

研究者番号：５０２７１６７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：シベリア出兵については、主要な事件や団体、人物についての研究すら乏しいままであり、ソ連崩壊以後のロシアにおける史料公開と研究の進展を取り入れることもできてこなかった。
本研究は、出兵の重要なきっかけをつくったチェコスロヴァキア軍団について、『日刊チェコスロヴァキア』の記事を詳細に検討し、書籍化したほか、アレクサンドル・コルチャークやヴァシーリー・ボルディレフ、立花小一郎などの重要人物の研究を推進し、論文を発表、もしくは日記の翻刻・出版を行った。またコルチャーク政権崩壊後の状況を研究し、沿海州の政権の性格および日本軍との関係について、尼港事件と北サハリン占領との関係も含めてこれを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
シベリア出兵後半期からその直後にかけての動向について、ロシア極東やモンゴルの状況や日本軍との関係が、史料的裏付けを持って明らかにされつつある。出兵の後半期である1920年1月以降、日本軍が撤兵した1922年10月まで、ウラジオストクでは4つの政権が登場した。これらについての考察は、極東の革命・内戦研究においても、シベリア出兵研究においても欠くことができないと考えるが、これまでロシアにおいても日本においても研究から取り残されてきた部分である。
立花小一郎日記はシベリア出兵研究の基本史料であり、その翻刻・出版は今後の出兵研究の史料基盤づくりに寄与するものであるが、完了まではあと数年を要する。

研究成果の概要（英文）：Study for the Japanese Intervention in Siberia were very limited, and there ware few articles concerning very important events or persons, organizations in its process.
We have closely studied the Czechoslovak Legion, by detailed research of the newspaper "Czechoslovak Daily", and published a book on the relationship between the Legion and Japan.
Otherwise, we have studied persons, played crucial role in the process of Siberian intervention, such as Alexandr Kolchak, Vasily Boldyrev, Tachibana Koichiro, published articles on them, or annotated transliteration of his diary. We have also studied situation in the Russian Far East after the collapse of Kolchak Government, character and activities of the newly established Government there, its relationship with Japanese Expedition Forces, and how related the Nikolaevsk Incident with the occupation of Northern Sakhalin by Japan.

研究分野：ロシア史

キーワード：シベリア出兵　ロシア革命　沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府　立花小一郎　アレクサンドル・コルチャーク　尼港事件　チェコスロヴァキア軍団　ヴァシーリー・ボルディレフ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

シベリア出兵については、細谷千博『シベリア出兵の史的研究』（1955 年）、原暉之『シベリア出兵：革命と干渉 1917-1922』（1989 年）、麻田雅文『シベリア出兵：近代日本の忘れられた 7 年戦争』（2016 年）などの研究や概説があるものの、まだまだ分からないことが多く、しかし研究対象として、日本史においてもロシア史においても低調な状況であった。

特に、ソ連崩壊後のロシアでアクセス可能になった史料や、新たな問題意識で次々と発表される文献・研究が、崩壊から 25 年を経ても、日本では十分に検討・消化されているとは思われず、さらには 1920 年代から知られている著名なロシア語文献や、国会図書館憲政資料室に 30 年以上前から所蔵されている日本側史料についてさえ、ほとんど検討されていない状況があった。

シベリア出兵は、第一次世界大戦（1914～1918）、ロシア革命（1917 年）と内戦という、きわめて複雑な状況を背景に進行し、満州（中国東北部を貫通する中東鉄道とその付属地は、ロシアの支配下にあった）や朝鮮（1910 年に日本に併合されたが、沿海州や満州には朝鮮人が多く住む地域があった）とも深い関わりがあった。また、ザバイカルや満州の状況は、当時、中国から独立しようとしていたモンゴルとの関りが深い。そのため、シベリア出兵を研究する上では、東アジアを広く視野に入れる必要があるだけでなく、出兵の大きなきっかけとなったチェコスロヴァキア軍団や、共同で出兵した米英仏の対応についても考察が必要である。

こうした複雑な事象の研究を推進するためには、専門をロシア史や日本史に限らず研究者を集めて、多方面から研究する体制の構築が要請された。

２．研究の目的

上記のことから、シベリア出兵については、基本的な事件・事象、人物についても研究が乏しいことが多く、まったく研究のない重要事件も少なくない。出兵の中盤である尼港事件（1920 年 3 月、5 月）や、沿海州武力衝突事件（1920 年 4 月）、ウラジオストク政変とメルクーロフ政権の成立（1921 年 5 月）も然りである。

そうした問題を、史料の発掘や基本的文献の検討を通じて少しでも埋め、特に出兵後半期のプロセスを、日露双方から検討することで、ともすればこれまでばらばらに理解されてきた、シベリア出兵中の諸事件が、相互にどのように関連していたかを解明することが期待される。

こうして、シベリア出兵における日本の軍と政府の行動とその意味を解明し、さらには同時期に日本が試みた山東半島や南洋などへの対外進出との関係、さらには近代東アジアの国際関係に及ぼした影響について検討することは、ワシントン体制の新たな理解につながるであろう。

３．研究の方法

本研究においては、バックグラウンドを異にする研究者が協力することで、問題の多角的な検討ができる研究組織を立ち上げた。すなわち、ロシア史を専門とする代表者のほかに、日本史、チェコスロヴァキア史、中国史、モンゴル史、東アジア政治外交史の専門家がここに参加している。また、メンバーの間で研究を発表しあうだけでなく、時に応じて、外部の専門家の参加を仰ぎ、不足している分野を補って、研究を深めてきた。

本研究においては、史料の発掘・公開、基本史料・文献の分析を推進し、一般公開を推進した。また一部の外国語文献については、翻訳を作成して参加者の間で共有を図った。これによって、あまり得意でない、あるいは読解に十分な時間を取れない外国語文献でも、内容を消化し、研究に役立てることが可能となる。

史料の発掘・公開については、1919 年 4 月に関東都督府の改組によって発足した関東軍の初代司令官に任じられ、1921 年 1 月にウラジオ派遣軍司令官に転じた立花小一郎（1861～1929）の日記を翻刻し、註解付きで出版している（継続中）。また、チェコスロヴァキア軍団に同行したチェコスロヴァキア国民会議の編集部が発行した『チェコスロヴァキア日刊新聞』の記事の翻訳を進めた。この翻訳自体相当の分量があり刊行には至っていないが、研究参加者間で共有し、ている。

このほか、コロナ・ウィルス感染症の流行のために 2 年目以降は困難となってしまったが、チェコやアメリカなど、外国の文書館史料の調査も一部実施することができた。

研究対象としては、主要な事件や人物・団体をなるべく正面から取り上げるようしにした。これは、そもそも重要部分の研究が進んでいないため、必然的に要請されたことであるが、同時に、これまでシベリア出兵と結びついて関心がもたれる歴史上の人物が少なかったことから、ここ

で人物論を試みることにより、シベリア出兵という複雑な歴史的事象に対する興味を喚起するきっかけとなれば、研究のすそ野を広げることにもつながると考えた。
　こうして取り上げた人物は、アレクサンドル・コルチャーク、グリゴリー・セミョーノフ、ヴァシーリー・ボルディレフ、立花小一郎であり、事件や団体としては、尼港事件、沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府、琿春事件、ウラジオストク政変（1921 年 5 月）がある。

４．研究成果
　本研究によって解明された主要な点として、以下のことを挙げることができる。

① シベリア出兵直前に日本・中国に滞在した時期のアレクサンドル・コルチャークの動向、および日本との関係を、詳しく解明した。従来、コルチャークは親英的で、日本とはうまが合わなかったように評価されてきたが、もともとそのような姿勢だったわけではなく、1918 年に中東鉄道管理局長Ｄ．ホールヴァトのもとで軍を統率する地位についた後の 5 月に、ハルビンの日本軍特務機関と衝突したことがきっかけであることがわかった。これは、その後のコルチャーク政権、およびその対日関係を考える上で、重要なポイントである。

② Ｖ．ボルディレフ陸軍中将の滞日期の状況の解明。ボルディレフは、1918 年 9 月にウラルに執政政府が成立すると、5 人の執政のひとりとして政権を担い、その軍を統率す地位にあったが、同年 11 月にオムスク政変によってコルチャーク政権が成立すると、そこを離れて同年末に来日し、1920 年 1 月まで 1 年余り日本に滞在して、コルチャーク政権の崩壊を見るてウラジオストクに入った。ボルディレフは、その後シベリア出兵下の沿海州において重要な役割を担うのだが、これまで日本の歴史学では、どうしたわけかボルディレフについてほとんど取り上げられることがなく、本論文は、ボルディレフの活動を扱う唯一の学術論文であるが、ボルディレフと日本の接点を押さえることは、ウラジオ派遣軍と現地地方政府との関係を見る上で欠かすことのできない前提である。

③ シベリア出兵時の日本による対ロシア軍事援助の全体像把握。日本はさまざまな反ボリシェヴィキ勢力に軍事援助を与え、特にグリゴリー・セミョーノフやイヴァン・カルムィコフなど、日本が強い影響力を持った勢力について援助が大きかったような印象が持たれているが、数的には決してそうではなく、むしろ、オムスクのコルチャーク政権やチェコスロヴァキア軍団に大きな援助が提供され、1920 年以降はその規模が非常に小さいものだったことを明らかにした。

④ 尼港事件(1920 年)および事件と北サハリン占領(1920-1925 年)の関係の解明。尼港事件は、シベリア出兵の中盤である 1920 年 3 月・5 月に発生し、同年に始まる北サハリン占領の理由とされてきた。本研究では、コルチャーク政権が崩壊した 1920 年 1 月の段階で、陸軍はすでに北サハリン占領を検討しており、尼港事件は、北サハリン占領を正当化するために都合よく利用された形跡のあることが見えてきた。また、単なる軍事占領でなく現地の行政権を接収して軍政を敷いたことは、当初の計画になかったもようであり、当時から国際法的な問題が指摘されていたことが判明した。

⑤ コルチャーク政権の崩壊した 1920 年初めにウラジオストクにつくられた、沿海州ゼムストヴォ臨時政府について、その性格や活動、日本との関係について概略を明らかにした。同政府は、ザバイカルに設けれた極東共和国とならぶもうひとつの緩衝国であり、極東の政治的統一の軸となる可能性もあったが、日本軍との武力衝突(1920 年 4 月)を経て、結局、極東共和国が主導する統一を受入れて、その地方政府に転じて幕をおろした(1920 年 12 月)。エスエル、ボリシェヴィキ、メンシェヴィキだけでなく、一時は商工業者まで参加したこのような連立政府は、ロシア革命・内戦期において唯一の存在であるが、これまで日本では 1 本の論文も発表されたことがない。この政権、およびこれに続いたウラジオストクの諸政権の研究は、シベリア出兵の後半部を理解する上で欠かすことができないと考える。

⑥ チェコスロヴァキア軍団と日本との関係の解明。1918 年に出兵が始まったころの友好的な関係が、その後徐々に変化して、1920 年 4 月にはハイラル事件に見られるような相互不信に至ったことを明らかにした。また、これに医療やチェコ語学習などの接点についての研究を加えて、書籍『チェコスロヴァキア軍団と日本 1918-1920』を上梓した。

⑦ 駐日ロシア武官関係文書の研究を進め、アメリカ、ヨーロッパ、ロシアにそれがどのような経緯で保存され、あるいは破棄され、あるいは継承されたかについて全般的に解明した。これは、第一次世界大戦期から内戦期にかけての日露関係を研究する上で、政府を失ったロシア在外機関の部分を扱っていくための重要な道しるべを提供するものである。

⑧ ザバイカル出身のカザーク軍人グリゴリー・セミョーノフについて、モンゴルに人民党政府が成立した後、1920 年代前半期の、モンゴルの王侯など有力者との関係を、新史料によって検討した。これによって、人民党政権初期のモンゴルの状況、およびロシアを追われた後のセミョーノフの活動についての理解が深められた。

⑨ 琿春事件(1920 年)の救恤問題の解明。1920 年秋に、沿海州や朝鮮と接する中国領の間島地域で発生したこの事件について、日本は朝鮮軍、関東軍、ウラジオ派遣軍を出して討伐を実施したが、後年、その被害者に対する「救恤」を行う。しかし、日本側はシベリア出兵被害者に対する救恤とは違って、これは中国側が行うべきものという立場を取り続け、その実施は何年も遅れることになったことを明らかにした。

⑩ 立花小一郎日記の翻刻・注解付き出版 1919 年に初代関東軍司令官に任じられ、1921 年にウラジオ派遣軍司令官に転じた立花小一郎の日記について、1919 年 12 月から 1921 年 3 月分までを翻刻し注解を付して発表した。これによって、当時の関東軍およびウラジオ派遣軍の動静、陸軍関係者はもとより、官界、政界、財界、ジャーナリスト、宗教界その他にわたるその交際ぶりが明らかとなりつつある。

⑪ シベリア出兵関係写真帖画像の公開。すでに 2 点の写真帖についてウェブサイトで画像を公開していたが、これに 4 点を追加した。また騎兵第 9 連隊の一員としてシベリア出兵に出征した杉浦新次郎の写真帖について、これをウェブサイトに公開した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計30件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　20件）

１．著者名 兎内勇津流	４．巻 105
２．論文標題 ヴァシーリー・ボルディレフと日本: 1919年滞日期を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ロシア史研究	６．最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長與進	４．巻 104
２．論文標題 『チェコスロヴァキア日刊新聞』は日本のシベリア出兵をどのように見ていたか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ロシア史研究	６．最初と最後の頁 167-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長與進	４．巻 24
２．論文標題 チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク：飯島周さんを偲びつつ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 スラヴ学論集	６．最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤本健太朗	４．巻 201
２．論文標題 ソ連の対日政策におけるアメリカファクター（一九二〇ー一九三三）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際政治	６．最初と最後の頁 66-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11375/kokusaiseiji.201_66	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 麓慎一	4．巻 104
2．論文標題 明治維新期におけるロシアのサハリン島政策	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 129-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中嶋毅	4．巻 840
2．論文標題 溪内謙『現代社会主義の省察』―スターリン体制解明の見取図	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 50-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/7940569	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 青木雅浩	4．巻 6
2．論文標題 ボドー事件とロシアの反ボリシェヴィキ派	5．発行年 2021年
3．雑誌名 北東アジア研究別冊	6．最初と最後の頁 185-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流	4．巻 104
2．論文標題 パネル「新史料から見直すシベリア出兵」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 84-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流	4．巻 106
2．論文標題 パネル「シベリア出兵と国際環境」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 97-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青木雅浩	4．巻 107
2．論文標題 （書評）寺山恭輔編『スターリンの極東政策ー公文書史料による東北アジア史再考』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松重充浩	4．巻 104
2．論文標題 『満蒙』誌上における伊藤順三：在満日本人による「満洲」認識過程に関する事例研究として	5．発行年 2021年
3．雑誌名 史叢	6．最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松重充浩	4．巻 22
2．論文標題 史料紹介：『満蒙』掲載の伊藤順三作画一覧	5．発行年 2022年
3．雑誌名 年次研究報告書（日本大学文理学部情報科学研究所）	6．最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流、及川琢英	4．巻 32
2．論文標題 立花小一郎回顧余録（三）大正9年5-7月（翻刻）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター	6．最初と最後の頁 50-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流、及川琢英	4．巻 33
2．論文標題 立花小一郎回顧余録（四）大正9年8-9月（翻刻）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター	6．最初と最後の頁 89-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流、及川琢英	4．巻 34
2．論文標題 立花小一郎回顧余録（五）大正9年10月-大正10年3月（翻刻）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター	6．最初と最後の頁 別冊1-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松重充浩	4．巻 43
2．論文標題 『満鉄調査時報』(1919年12月～1931年8月)華中・華南関係記事目録	5．発行年 2021年
3．雑誌名 近代中国研究彙報	6．最初と最後の頁 107-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流	4．巻 110
2．論文標題 沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府(1920年)試論：シベリア出兵ともうひとつの緩衝国	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 51-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流	4．巻 110
2．論文標題 パネルA「シベリア出兵ーその内外への波及」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 108-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 エドワルド・バールィシェフ	4．巻 103
2．論文標題 反ボリシェヴィキ諸勢力の内戦闘争と日本の軍事的な支援(1918～1922年)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 46-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中嶋毅	4．巻 516-9
2．論文標題 ハルビンにおけるロシア人学校教育の発展 1898-1922	5．発行年 2020年
3．雑誌名 人文学報	6．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ｍ．Ａоки（青木雅浩）	4．巻 Вып．25
2．論文標題 Ｏхтины илтгэл дэх Богд хаан ба Д．Богоогийн хэрэл явдал（A.Ya．オフチンの報告書におけるボグド・ハーンとボドー事件）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Ｔружы Института востоковедения РАН	6．最初と最後の頁 310-329
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 兎内勇津流、及川琢英	4．巻 31
2．論文標題 立花小一郎回顧余禄(二)　大正8(1919)年12月～9(1920)年4月	5．発行年 2019年
3．雑誌名 近現代東北アジア地域史研究会Newsletter	6．最初と最後の頁 43-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井竿富雄	4．巻 13
2．論文標題 第一次世界大戦期の報徳会	5．発行年 2020年
3．雑誌名 山口県立大学学術情報	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤本健太朗	4．巻 201
2．論文標題 ソ連の対日政策におけるアメリカファクター(一九二〇-一九三三)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際政治	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 David Wolff	4．巻 10(1)
2．論文標題 Introduction to EBR Special Section on Russo-Chinese Relations and Northeast Asia	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Eurasia Border Review	6．最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14943/ebr.10.1.71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青木雅浩	4．巻 8
2．論文標題 1920年代前半の外モンゴルの国内情勢に関する情報と政治情勢	5．発行年 2023年
3．雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6．最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中嶋毅	4．巻 519(9)
2．論文標題 道標転換派の指導者ニコライ・ウストリャーロフと日本	5．発行年 2023年
3．雑誌名 人文学報(東京都立大学)	6．最初と最後の頁 35-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 エドワルド・バールィシェフ	4．巻 108
2．論文標題 極東滞在期のコルチャーク提督とロシア内戦・対露軍事干渉の展開(1917年11月～1918年9月)	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 3-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Baryshev Eduard	4．巻 23
2．論文標題 The Puzzles and Secrets of Archival Rossica Abroad: How the Archive of the Russian Military Attach? in Japan (1906-1925) Was Saved	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Slavic & East European Information Resources	6．最初と最後の頁 287-316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15228886.2022.2105189	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 エドワルド・バールィシェフ	4．巻 109
2．論文標題 書評：林忠行著『チェコスロヴァキア軍団：ある義勇軍をめぐる世界史』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 ロシア史研究	6．最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計31件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 井竿富雄
2．発表標題 琿春事件・間島出兵被害者に対する救恤
3．学会等名 ロシア史研究会2022年度大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 中谷直司
2．発表標題 日本外務省の「新外交」呼応論と満蒙・シベリア：ロシア革命からワシントン会議まで
3．学会等名 ロシア史研究会2022年度大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 エドワルド・バールィシェフ
２．発表標題 極東滞在期のコルチャーク提督と対露軍事干渉問題(1917 年11月－1918 年9月)
３．学会等名 ロシア史研究会2020年度大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松重充浩
２．発表標題 在大連日本側メディアにおけるシベリア出兵認識－『満洲日日新聞』（1918年9月-1920年12月）掲載関係記事を事例として
３．学会等名 ロシア史研究会2020年度大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 アメリカの史料から北サハリン占領を考える
３．学会等名 函館日ロ交流史研究会・はこだて外国人居留地研究会合同例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 長與進
２．発表標題 チェコスロヴァキア軍団側から見たヤロスラフ・ハシェク
３．学会等名 日本スラヴ学研究会飯島周先生追悼シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤本健太朗
２．発表標題 極東共和国の「対露交渉」：対日政策における「指導」関係の実態
３．学会等名 ロシア・東欧学会2020年度大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府(1920年)試論
３．学会等名 第8回シベリア出兵史研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 青木雅浩
２．発表標題 1920年代前半のモンゴルの政治情勢とロシア内戦ー外モンゴル関係史料に見る反ボリシェヴィキ派の活動
３．学会等名 第8回シベリア出兵史研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 戦前の千島とサハリン
３．学会等名 第3回国境研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 長與進
２．発表標題 「ハイラル事件」の「藪の中」に踏み入る：資料と先行研究の概観
３．学会等名 第9回シベリア出兵史研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府(1920年)試論
３．学会等名 ロシア史研究会2021年度大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 青木雅浩
２．発表標題 ロシア反ボリシェヴィキ派とモンゴル
３．学会等名 ロシア史研究会2021年度大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 シベリア出兵の転換点としての1920年
３．学会等名 第31回(2021年度)近現代東北アジア地域史研究会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 エドワルド・バールィシェフ
２．発表標題 ニコラエフスク事件（1920年）と北サハリン占領
３．学会等名 第31回(2021年度)近現代東北アジア地域史研究会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 長與進
２．発表標題 『チェコスロヴァキア日刊新聞』はソビエト・ポーランド戦争をいかに報道したか
３．学会等名 第10回シベリア出兵史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 イヴァン・クヴァチ(1908-1978)の写真に見る南サハリン、1946年10月
３．学会等名 サハリン樺太史研究会第59回例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Susumu Nagayo
２．発表標題 The Hilar Station Incident on April 11, 1920.
３．学会等名 Opening Conference. Competing Imperialisms Research Network (CIRN1)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Susumu Nagayo
２．発表標題 What Really Happened at Hailar Station, Manchiria, on April 11, 1920? (Continuation)
３．学会等名 Competing Imperialisms Research Network (CIRN2)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Susumu Nagayo
２．発表標題 Czechoslovak Legion and Japanese Troops - How did the Newspaper The Czechosloval Dairy View the Japanese Siberian Expedition?
３．学会等名 The 19th International Conference of the Institute on International History Textbooks. Shanghai Provisional Government and the Czechoslovak Legion（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 尼港事件はどのようにして起こったか: 三月とその前後
３．学会等名 サハリン樺太史研究会第54回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 兎内勇津流
２．発表標題 アレクサンドル・ガーニンのコルチャーク論
３．学会等名 シベリア出兵史研究会第4回
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤本健太朗
２．発表標題 日本軍撤兵問題と極東共和国の外交：「緩衝国」の役割をめぐって
３．学会等名 ロシア史研究会2019年度大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 青木雅浩
２．発表標題 モンゴル人民共和国建国期の政治事件と国際情勢
３．学会等名 シンポジウム「北東アジアにおける「近代」空間の形成：帝国と思想」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 松重充浩
２．発表標題 満洲事変之前在大連的日本人社會對蒙古的認識：以大連刊行的日語媒體為中心
３．学会等名 中央研究院近代史研究所學述演講（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 麓慎一
２．発表標題 シベリア出兵の諸問題：シベリア撤退を中心に
３．学会等名 シベリア出兵史研究会第4回
４．発表年 2019年

１．発表者名 松重充浩
２．発表標題 大連日本語メディアが伝えたシベリア出兵と現地政況(その1)：『満洲日日新聞』の分析を中心として
３．学会等名 シベリア出兵史研究会第5回
４．発表年 2020年

１．発表者名 K. Fujimoto
２．発表標題 Examining Continuity of the Soviet Policy Toward Japan During the 1920s and 1930s
３．学会等名 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤本健太朗
２．発表標題 20年代ソ連の対日政策における英米ファクター
３．学会等名 日露関係史研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤本健太朗
２．発表標題 1920年代後半におけるソ連の対日政策と満州事変
３．学会等名 ヨーロッパ近現代史若手研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 David Wolff
２．発表標題 Russia's Great War and Revolution in Northeast Asia: New Findings and Interpretations
３．学会等名 Forum at the Ludwig Maximilians Universitat, Munich（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計15件

１．著者名 原 暉之、兎内 勇津流、竹野 学、池田 裕子、エドワルド・バールィシェフ、神長英輔、井竿富雄、天野尚樹、井澗裕、三木理史、中山大将、ヤロスラヴ・シュラトフ、倉田有佳、田村将人、浅野豊美	４．発行年 2023年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 456
３．書名 日本帝国の膨張と縮小	

１．著者名 日ソ戦争史研究会	４．発行年 2023年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 512
３．書名 日ソ戦争史の研究	

１．著者名 長與進	４．発行年 2023年
２．出版社 教育評論社	５．総ページ数 288
３．書名 チェコスロヴァキア軍団と日本 1918-1920	

1．著者名 宮脇　昇、樋口恵佳、浦部浩之、岩下明裕、玉井雅隆、松永歩、兎内勇津流、本田悠介、中川洋一、内田州、吉村拓人	4．発行年 2022年
2．出版社 大学教育出版	5．総ページ数 280
3．書名 国境の時代	

1．著者名 環オホーツクの環境と歴史編集委員会	4．発行年 2022年
2．出版社 サッポロ堂書店	5．総ページ数 80
3．書名 環オホーツクの環境と歴史　5号	

1．著者名 Evan Dawley; Frederick R. Dickinson; G. Clinton Godart; Tze-ki Hon; Noriko Kawamura; Junghoon Lee; Tatiana Linkhoeva; Tosh Minohara; Tadashi Nakatani; Chunling Peng and Torsten Weber	4．発行年 2020年
2．出版社 Lexington Books	5．総ページ数 291
3．書名 Beyond Versailles: The 1919 Moment and a New Order in East Asia	

1．著者名 筒井清忠；村瀬信一；真辺将之；武田知己；奈良岡聰智；牧野邦昭；渡辺滋；季武嘉也；篠原初枝；廣部泉；永島広紀；麻田雅文；高原秀介；中谷直司；古川江里子；福家崇洋；進藤久美子；黒沢文貴；渡辺公太；高杉洋平；小山俊樹；岩谷将；梶田明宏	4．発行年 2021年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 512
3．書名 大正史講義	

1．著者名 北村暁夫；中嶋毅	4．発行年 2022年
2．出版社 放送大学教育振興会	5．総ページ数 256
3．書名 近現代ヨーロッパの歴史	

1．著者名 井桁貞義；伊東一郎；長與進；浦 雅春；坂内徳明；堀江新二；岩田 貴；加藤史朗；坂内知子；阪本秀昭	4．発行年 2020年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 348
3．書名 スラヴァンスキイ・バザアル ： ロシアの文学・演劇・歴史	

1．著者名 久保亨；瀧下彩子；山本真；弁納才一；富沢芳亜；高田幸男；浅田進史；田中比呂志；松重充浩；吉田健一郎；吉沢誠一郎；本庄比佐子	4．発行年 2021年
2．出版社 東洋文庫	5．総ページ数 406
3．書名 戦前日本の華中・華南調査	

1．著者名 牧野元紀；生田美智子；大島幹雄；沢田和彦；岡崎礼奈；兎内勇津流；畔柳千明；谷本晃久；エドワルド・バールィシェフ；新井正紀；下斗米伸夫；麻田雅文；平野健一郎	4．発行年 2020年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 520
3．書名 ロマノフ王朝時代の日露交流	

1．著者名 片山慶隆；中谷直司；町田祐一；手塚雄太；茶谷誠一；浜田幸絵；島田大輔	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 330
3．書名 アジア・太平洋戦争と日本の対外危機：満洲事変から敗戦に至る政治・社会・メディア	

1．著者名 加藤直人；C.P. Atwood；井上治；松川節；S. Chuluun；B. Ulaan；Dalijab；萩原守；Oka Hiroki；Agata Bareja-Starzynska；Jarzy Tulisow；Ookhnoi Batsaikhan；Tachibana Makoto；周太平；ボルジギン・ブレンサイン；中見立夫；広川佐保；青木雅浩；Sodbilig；Naheya；Wendurina；張永江	4．発行年 2022年
2．出版社 加藤直人研究代表「科研基盤(B)(一般)」研究会	5．総ページ数 167
3．書名 「帝国」の秩序と再編：モンゴルの文書と史跡の探求	

1．著者名 李暁東；李正吉；飯山知保；岡洋樹；S.チョローン；中村篤志；韓東育；澤井啓一；井上厚史；劉建輝；石田徹；柳澤明；茂木敏夫；井上治；黄克武；張寅性；エドワルド・バールィシェフ	4．発行年 2022年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 674
3．書名 論集北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響	

1．著者名 井竿富雄、井本三夫、佐藤守、清水実、中川正人、堀地明	4．発行年 2019年
2．出版社 集広舎	5．総ページ数 310
3．書名 米騒動・大戦後デモクラシー百周年論集 II	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松重　充浩 (Matsushige Mitsuhiro) (00275380)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	バールィシェフ　エドワルド (Baryshev Eduard) (00581125)	筑波大学・図書館情報メディア系・助教 (12102)	
研究分担者	井竿　富雄 (Izao Tomio) (10284465)	山口県立大学・国際文化学部・教授 (25502)	
研究分担者	麓　慎一 (Fumoto Shin'ich) (30261259)	佛教大学・歴史学部・教授 (34314)	
研究分担者	長與　進 (Nagayo Susumu) (40172564)	早稲田大学・政治経済学術院・名誉教授 (32689)	
研究分担者	Ｗｏｌｆｆ　Ｄａｖｉｄ (Wolff David) (60435948)	北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授 (10101)	
研究分担者	中嶋　毅 (Nakashima Takeshi) (70241495)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	中谷　直司 (Nakatani Tadashi) (70573377)	帝京大学・文学部・准教授 (32643)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	青木　雅浩 (Aoki Masahiro) (70631422)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	
研究分担者	藤本　健太朗 (Fujimoto Kentaro) (40851944)	東北大学・東北アジア研究センター・JSPS特別研究員(PD) (11301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関